

小川未明文学館 館報 第八号

第八号

小川未明文学館

vol.8



小川未明文学館

新潟県上越市本城町八一三〇(高田図書館内)

TEL 025-523-1108
FAX 025-523-11086



『眠い町』ギャラリートーク

ミュゼ雪小町にて開催した「未明童話『眠い町』絵本原画展」。作者の画家、堀越千秋さんによるギャラリートークを2日間にわたって行い、堀越さんが原画一枚一枚の前で、絵に込めた思いや時代背景との関わりなどをお話してくださいました。参加者からはさまざまな質問が飛び出し、堀越さんとの交流の機会となりました。2日目には、カンタオール(フラメンコの歌い手)でもある堀越さんから、即興のカンテ(フラメンコの歌)が披露され、会場は大いに沸きました。

目次

小川未明文学館館報 第八号

二〇一四年五月三十一日発行(年刊)

寄稿

石垣雅美

「日本のアンデルセン 小川未明」展によせて

報告

「文学館一年の記録(平成二十五年度)
にいがた文化の記憶館講演会

「小川未明童話の新しい扉をひらく」

文学館講座

謙信KIDSスクールプロジェクト「童話の楽校」

所蔵品紹介

小川未明文学賞

【ボランティアネットワークだより】
「のばら vol.10」

【文学館からのお知らせ】

「日本のアンデルセン 小川未明」展に

よせて

石垣 雅美

(にいがた文化の記憶館 学芸員)



2014年1月4日から3月30日まで、新潟市中央区にあるにいがた文化の記憶館において、小川未明文学館の出張展示「日本のアンデルセン 小川未明」展を開催した。

当館は2013年6月4日に新潟市中央区万代の新潟日報メディアシップ5階に開設した文化施設である。館内では、近現代の新潟県が輩出したまたは縁のある文化人を紹介している。県内の顕彰施設や団体との連携を図りながら、当館で

出張展示をしてもらうことで、偉人の業績の伝承と県内の顕彰施設のインフォメーションセンターとしての役割を担うことを目的に設置された。

13年8月に県内の顕彰施設の担当者を招き、顕彰施設のネットワークの可能性を図る会議を開催した際、小川未明文学館より出張展示のご提案を頂き、実現となつた。



新潟日報メディアシップ



にいがた文化の記憶館館内

・なぜ今、小川未明なのか？

筆者の幼いころに親しんだ童話を振り返ってみると、「小川未明」の名前は記憶がない。当時、未明はすでに忘れられた人となっていた。未明の創作世界は自然の厳しさや人間の弱さなどネガティブな、子ども向けの本にそぐわない世界と考えられているため、おすすめ本などには出てこなかつたのだろう。

しかし、11年の大震災を経験し自然の厳しさなどを目の当たりにしたことで、自然に対する考え方があわせてきたことにより、未明の書いた世界が身をもつて理解できるのではないか。未明童話のとらえ方が変わってきてはいないだろうかとの思いから開催準備を進めた。

・「おかえり未明」

会期中の2月11日に関連イベント「小川未明童話の新しい扉をひらく」鼎談を開催した。未明のご遺族で詩人の小川英晴氏、未明研究者で上越教育大学教授の小埜裕一氏を迎えて、当館の神林恒道館長が聞き手となり、これまでの未明童話の読まれ方と大震災を経ての新しい捉え方についてお話をいただいた。

この鼎談では、弱者への優しさや思いやりを根底にした思想を基盤に、童心にかえつて社会を見直していくとした、作家としての姿勢を再確認した。併せて、「動と静」「暗と

明」など相反する世界や状況などを対比、調和させながら物語世界を創り出した文学者のものすごい力量を教えられた。

上記の点を踏まえて、1958年に「さよなら未明」運動がおこった背景や未明童話が忘れられていった経緯をみつめながら、未明童話の現代的意義を読み直していく必要があるとまとめた。

最後に、本展を契機に「おかえり未明」という運動を、という声が上がっていたが、県内で未明童話の読み直しが始まる事を願う。



「日本のアンデルセン 小川未明」展

◇ 文学館一年の記録 ◇

朗読研修会

4月26日・5月24日・6月21日

参加者 各回24名



橘由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。研修会では、発声練習方法や朗読の基礎などを学び、未明童話「月とあざらし」「月夜と眼鏡」で実践的な朗読を行いました。参加者からは、「一人ひとり具体的に指導してもらえて良かった」「もつと研修会の回数を増やしてほしい」といった声が聞かれました。

**特別展（ミュゼ雪小町）
未明童話『眠い町』絵本原画展**

8月4日～8月24日

来館者 2255名

ミュゼ雪小町で、平成18年に架空社より出版された『眠い町』の絵本原画を展示しました。画家、堀越千秋さんの迫力ある原画を中心に、来場者からは「絵に添えられた『画家のことば』がとても良かった」「絵が未明の先見性をより際立たせ、「文明とは」について考えさせられた」との感想が寄せられました。



**特別展（小川未明文学館）
未明童話『眠い町』絵本原画展**

10月5日～11月10日

来館者 2760名

8月に実施し好評を博した『眠い町』の絵本原画を、アンコールにお応えして小川未明文学館でも展示しました。

会期中、特別展おはなし会を開催しました。



特別展おはなし会

10月6日

参加者43名

未明ボランティアネットワークの5つの会が、合同でおはなし会を開催しました。未明童話「眠い町」、「野ばら」、「お母さんのひきがえる」、「ガラス窓の河骨」、「どこかに生きながら」を、自作の映像や音楽にのせて発表しました。



『眠い町』 架空社 2006年
小川未明／作 堀越千秋／絵



童話創作講座

10月6日・11月24日（入門コース）
(実践コース)

参加者 14名

▲上越市在住の児童文学作家 杉みき子さんを講師に、入門コースと実践コースに分かれ短篇童話の書き方について学びました。入門コースでは、まず講義を受け、その後書いた作品の講評を受けました。受講者の皆さん的作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや図書館で読むことができます。



文学館講座

10月20日・11月10日・12月1日
参加者 各回36名

▲未明や特別展にちなんだ3回の講座を開催しました。講師は、第一回宮川健郎さん「小

川未明と新美南吉」「童話」のはじまり、「童話」のアンカリー、「第二回小堀裕二さん「眠い町」とその周辺」、第三回土居安子さん「小川未明の物語世界を遊ぶ－作品選択・演出方法について－」でした。（詳しくは文学館講座の記録の頁をご覧ください）

日本のアンデルセン 小川未明

1月4日～3月30日

▲にいがた文化の記憶館 特別展
「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育む」ことを目的に平成4年から募集している第22回小川未明文学賞の贈呈式を東京都内で開催。大賞は宇佐美敬子さんの「影なし山のりん」、優秀賞はこうまるみずほさんの「黒い子ネコと魔女おじさん」、高森美由紀さんの「春一番」でした。文学賞の頁で、大賞の宇佐美敬子さんの「受賞のひとこと」を紹介しています。



第22回 小川未明文学賞贈呈式

3月27日

の協力で、出張おはなし会を開催しています。学校や福祉施設など、25年度は25カ所（1348人）を訪れました。

出張おはなし会

毎月第2・第4日曜日

▲未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力で、月2回のおはなし会を開催しています。25年度は24回で268人の皆さんに楽しんでいただきました。



文学館おはなし会



文学館所蔵品紹介

▲文学館の意義や役割を皆さんに知っていただき、さらに利用していただきため、小川未明顕彰委員会の協力で、文学館の所蔵する未明に関する貴重な資料を順次紹介する小展示を行っています。展示の一部は、旧第四銀行高田支店でもご覧いただくことができます。



謙信KIDSスクールプロジェクト

童話の楽校

（開催日） 第1回 10月6日
第2回 11月10日
第3回 12月1日
第4回 12月8日

（参加者） 小学1～3年生 14名

未明の童話にふれ、その作品世界を体験し、豊かな心を養つてもらうことを目的に、24年度から、謙信KIDSスクールプロジェクト

「童話の楽校」を開催しています。対象は小学1年～3年生で、14名が参加しました。

第1回

小川未明文学館と高田図書館を探検しよう

まず、子どもたちに未明のことを知つてもらおうと、未明のした仕事や、人となりについてお話をしました。その後、文学館でおはなし会を聞き、館内に関するクイズをしたあと、影絵やしがけで遊んで、文学館を体験してもらいました。図書館では、舞台裏である地下書庫を見学したり、職員から本の探し方を教わつたりしました。
感想「いろいろな小川未明のお話が聞けてよかったです」「図書館の秘密の場所に入れて、昔の本が見つけられてよかったです」

第2回

童話の世界に親しもう

黒姫童話館の土居安子さんによる童話館の説明を受けながら見学をおこない、日本や世界各国の様々な童話に触れ、関心をもつてもらいました。
感想「グリム童話やアンデルセン童話、『うりこひめ』が想い出に残った」「3年生が読んでくれた紙芝居が面白かった」「いいお話の本、おもしろい本がたくさんあった」「紙芝居や本、ぬいぐるみ、きのこの家、おかしの家、亀、シンデレラの鏡、不思議な眼鏡、お面などを見つけた」



第3回

未明童話の主人公になろう

大阪国際児童文学館の土居安子さんを講師に、こえやからだを使って未明童話を体験し、作品世界を遊ぶワークショップを行いました。最初に、それぞれが違う動物になつて行動しへの動物が当てるゲームで緊張をほぐし、続いて「山の上の木と雲の話」を題材にして、

物語体験をしました。子どもたちはグループに分かれて風や木、鳥や雲になりきつて活動していました。

感想「木や雲になりきつたのがおもしろかった」「芽が出るところから、木が成長していくようすを表現したのがおもしろかった」

感想「本をつくれたことが楽しかった」「絵本などを読んで、スピンドルやサイドストーリーを考えてみたい」「絵をいろいろ描けたので、童話づくりが楽しかった」

感想「本をつくれたことが楽しかった」「絵本などを読んで、スピンドルやサイドストーリーを考えてみたい」「絵をいろいろ描けたので、童話づくりが楽しかった」

第4回

未明童話の絵本をつくろう

前回体験した「山の上の木と雲の話」を思い出しながら、絵本をつくりました。1、2年生は体験したシーンや、好きなシーンを選んで絵を書いてもらい、3年生は物語の続きを

その絵を考え、オリジナリティあふれる作品に仕上げました。



にいがた文化の記憶館講演会

小川未明童話の新しい扉をひらく

平成26年2月11日、新潟市にある「にいがた文化の記憶館」において、上越教育大学教授の小埜裕二さん、詩人であり小川未明の孫である小川英晴さんをゲストに迎え、にいがた文化の記憶館館長の神林恒道さんを進行役とした鼎談形式での講演会を開催しました。朗読ボランティアによる未明童話「赤い蠟燭と人魚」、「眠い町」の朗読を交えながら、小川未明についてそれぞれ独自の視点で語っていました。本頁ではその一部を紹介します。

—今こそ「おかえり未明」と言つてもよい時代ではないか—

小埜 裕二

(上越教育大学教授・小川未明顕彰委員会副委員長)

昭和20年代後半に「さよなら未明」と言われ、未明が文学の世界から、あるいは一般の人々の視界から遠ざかつた時期が長く続きました。そうした事態の背景を考えると、戦争協力を行つた未明に対する暗黙の批判が影響していたのではないかと思われます。それから、「未明の童話は古い」という言い方もされますが、その古さは、戦後の、前を向いて歩いて行く、障害を乗り越えて進んで行く「子ども像」と未明童話の子ども像が合致しなかつたために言われたものと思われます。また、戦後、童話の中で、例えば「いじめ」、「死の問題」あるいは「性の問題」など、今まで扱わなかつたためが増えしていく中で、未明の文体ではそうした内容を的確に捉えられないという意見も多かつたように思います。未明の文章は、イメージで構成され、強烈な印象を読者に与えるが、混み入った心情や出来事を説明するには向きだと考えられたのです。

しかしながら、今、「赤い蠟燭と人魚」の冒頭の朗読をお聞きになつて、皆さんは何をお感じになつたでしょうか。人魚のお母さんの愛情がよく表れていくと思われたのではないでしようか。自分はどうなつても、子どもだけは幸せにしたいというお母さん人魚の気持ちがよく出ています。しかしこれまで「赤い蠟燭と人魚」がどのように読まってきたかというと、「お金に弱い」「心変わりが激しい」人間の醜さを描いた童話と考えられてきました。未明は人間の醜さも書いていますが、一方で人魚の愛情も書いています。人間の醜さと対比させるかたちで、人魚の愛情や信頼を描いていくわけです。

「さよなら未明」を唱えた人々は、未明の物語の暗い部分ばかりを見ていたのではないでしようか。しかし未明は人間の暗い部分を凝視したからこそ、希望の光を見ること、求めることができたのだと思います。未明文学にある希望の光が昭和20年代の作家たちには見えなかつたのでしよう。泥中に咲く花もあります。その花の意義が理解されてきたのが近年だとすると、「さよなら未明」ではなく、今こそ「おかえり未明」と言ってよい時代ではないかと私は考えていました。



—雪の結晶のように儂い、魂の結晶、それが未明童話である—

小川英晴（詩人）

僕は初めて未明童話を読んだ時に、「語り方の「一」であります。」という言葉に違和感を覚えて、あまり上手な文章じゃないなど思つたんですね。それに、突然文章が「ぶつ」と断ち切れるように終わってしまうこともあります。「この続きを本当はどうなつているんだろう」と思つたことがあります。その頃は、本当の意味で未明童話とまだ出会つてなかつた。でも年を経るごとに繰り返し未明童話を読んでいくにつれて、未明は文学的に優れた童話を書こうとしたのではなく、一人の人間として、弱き人、虐げられた人のために何か自分のできることはないか、そのような弱い側に立つ人の魂を、童話という形式を通して作品にしたのではなかつということに思い至りました。魂の結晶ですから、小説のように細かく決着がつくまで書いてはいません。つまりそれは雪の結晶のように儂い、魂の結晶、それが未明童話ではないかということ、すなわち、未明が生涯を賭けて訴えていたのは人間の心の大切さだと思います。

今の資本主義社会では、どんな人に優しくし、人を思いやつても、それは必要ない、お金にならないという時代になつてているのではないかと感じます。このままだと、どんどん人間不信に陥り、貧富の差はもつと大きくなるだろうし、自然界の汚染についても責任をどんどん後回しにされて、ついには町が滅んでしまうという、「赤い蠟燭と人魚」の最後の一に行に行き着くのではないのかという気がするんですね。

—芸術とは美しいだけではなく、そこに訴えるものがなければならない—

神林恒道（にいがた文化の記憶館館長）

芸術というのは美しいものでなければならぬ。ただし美しいだけでは芸術にはならない。なにかそこに訴えるものがなければいけない。そういうバランスが取れたところに内容と形が一致した美しいものの結晶が生み出される。それが美だと、本当の美だと、私は思つています。かつて「さよなら未明」の運動をリードした人達はその辺りのことは分からなかつた。新しいとか古いとかそういう価値づけで、未明の童話を判断したのです。もし新しい古いで芸術の価値が決まるならば、森鷗外とか夏目漱石は古いからダメだという話になるでしよう。ピカソが新しいからいいか、そうしたらモナリザは古いからダメだ、ミロのビーナスはもつと古いからもつとダメだという話になつてしまふ。つまり芸術には新しいとか古いとかいうことはないわけで、そのものが持つてゐる永遠の命が必ずあるはずです。そういうことを未明の童話は教えてくれるのではないかと思っています。

本日、お二人の先生のお話の中にもありました、美しい表現とそこに込められた思いやり、そうしたものがバランスよく調和しているのが未明の童話ではないかと思います。それから、大自然ということを小川先生が言われましたけれども、ただ社会を改良するということではなくて、その人間社会が存在している、宇宙との調和とか自然のあり様までも、自分の視野に入れて未明は童話を書いたのではないかと思います。



文学館講座

平成25年度の文学館講座は、宮川健郎氏、小堀裕一氏、土居安子氏を講師に開催しました。ここでは、講座内容の一部をご紹介します。

第一回 小川未明と新美南吉—「童話」のはじまり、「童話」のアンカーリー（講座要旨）

10月21日（日） 宮川健郎氏
（武藏野大学教授）



小川未明と新美南吉—「童話」のはじまり、「童話」のアンカーリー（講座要旨）
10月21日（日） 宮川健郎氏
（武藏野大学教授）
「小川未明と新美南吉」という題ではあります。小川未明と新美南吉という題ではあります。小川未明と新美南吉という題ではあります。小川未明と新美南吉という題ではあります。小川未明と新美南吉といふことを考えていきます。日本

子といふ人を媒介にして小川未明と新美南吉といふことを考えていきます。日本

の伝統文化では、未明が批評的に扱われる中で、新しいものを摸索しようという動きだったわけです。未明は単に未明ではないと、童話の時代の代表的な存在が未明なんだということで、今では「童話伝統批判」という言い方のほうが僕等の中では多く使われています。子どもの文学も戦争という問題、あるいは戦争を引き起こす社会というものを書かなくてはいけなくなつてしましました。そうした時に未明に代表されるような詩的で象徴的な言葉では社会といふものは扱えないというふうに考えて、もつと散文的な、社会の問題を説明できるような言葉を獲得していく中で書いていこうと考えたのが現代児童文学なんですね。50年代はそういうふうに考えていました。それで1959年

の『だれも知らない小さな国』（佐藤さとる著 講談社）が、作品としてはつくり違つたものを生み出した代表ということになるのですが、これにはコロボックルというアイヌの伝承の小人がでてくるんですが、小人といふ存在を描き出しながら散文的な言葉で書かれていく、非常に構築的なファンタジーなんです。これが出来た時まもなく石井桃子さんが、『母の友』1959年12月号に寄稿しました。石井は、「読んでやつたり、口で話したりできなお話は、子どもにはおもしろくない」と言い、そして、「だれも知らない小さな国」を「日本の創作童話にめずらしい筋の通ったファンタジー」としながらも、子どもに読み聞かせるには向かないものとしています。ところが、現代児童文学の読者の中心は、石井桃子などが考えていたような幼年ではなくて、10代の前半くらいの、もう作品を默読することができる子どもたちになつてきます。ですから声で読んであげるお話を自分で読むお話を分かれてきたのです。そのことを私は現代児童文学が成立したときの「声」のわかれ」と呼んでいます。

石井桃子だけがこのようなことを考えていたわけではなくて、そつくりのことを書いているのが、それよりだいぶ以前の新美南吉のエッセー「童話における物語性の喪失」です。『早稲田大学新聞』に1941年に書かれた文章で、南吉は早稲田の出身者ではありませんが、縁があつて頼まれて書いたということです。1941年当時の子どもの文学の状況をふまえながら書いている文章です。物語性

も大きな転換点であったのが1950年代から60年前後にかけての動きだと思います。敗戦後間もない時代ですが、長い戦争の後には、日本の社会の様々な場面で大きな見直しが行われました。文学のいろいろなところでも見直しがありました。大正から昭和戦後にかけての童話の時代の代表的な作者、それはまず

小川未明なんですねけれども、代表的な作者の作品とか子供観とか文学觀を検証していく中で、じゃあどうしようかというふうに摸索していた時代が50年代です。50年代の議論をしていました。「童話伝統批判」と呼んでいます。当時は「未明伝統克服」とかですね、そういう言葉がむしろ使われたようですが、それくらい未明が批判的に扱われる中で、新しいものを摸索しようという動きだったわけです。未明は

単に未明ではないと、童話の時代の代表的な存在が未明なんだということで、今では「童話伝統批判」という言い方のほうが僕等の中では多く使われています。子どもの文学も戦争という問題、あるいは戦争を引き起こす社会といふものを書かなくてはいけなくなつてしましました。そうした時に未明に代表されるような詩的で象徴的な言葉では社会といふものは扱えないというふうに考えて、もつと散文的な、社会の問題を説明できるような言葉を獲得していく中で書いていこうと考えたのが現代児童文学なんですね。50年代はそういうふうに考えていました。それで1959年

年、小川未明なんですね。石井桃子は「子どもたちのための物語は口で話す「お話し」と切りはなせない」、南吉は紙で読む童話と「から聞かされる童話は同じジャンルだ」という書き方をしています。言い方は違いますけども、石井桃子は南吉の考え方をふまえてそつくりのことを言っていると思います。

第二回 「眠い町」とその周辺（講座要旨）

11月10日（日） 小堀裕一氏
（上越教育大学教授）

「眠い町」は『日本少年』という雑誌に大正3年5月に発表されました。第一次世界大戦がはじまった年です。「眠い町」は未明が

あなた方はただ失望の吐息をつかれるばかりであろう。」というふうに書いています。石井桃子は「子どものための物語は口で話す「お話し」と切りはなせない」、南吉は紙で読む童話と「から聞かされる童話は同じジャンルだ」という書き方をしています。言い方は違いますけども、石井桃子は南吉の考え方をふまえてそつくりのことを言っていると思いま

第二回 「眠い町」とその周辺（講座要旨）

11月10日（日） 小堀裕一氏
（上越教育大学教授）

「眠い町」は『日本少年』という雑誌に大正3年5月に発表されました。第一次世界大戦がはじまった年です。「眠い町」は未明が



裏日本という言葉をキーワードに日本の近代の問題を明らかにした良書ですが、それによると明治の最初の頃は、裏日本というような考え方はなかったようです。それぞれの県が豊かに暮していた。ところが近代化の過程で表日本にあたる地域が発展してきて、そこに資本を集中するために、裏日本から人や物や金が集められるようになっていく。そのなかで表日本に対し、日本海側が裏日本と呼ばれるような格差ができてきたと説明されています。

あまり童話を書いていなかつた時期、それも初期の時代に書かれた童話です。未明は、子どもの心を大事にし、子どもの姿になつてそのときの感動を書くのが童話だと言つています。けれどもこの作品はあまりそつした童話の心（童心）が感じられない童話です。

「眠い町」を読むと、自然破壊や環境破壊といったことに警鐘を鳴らした話だといふことがわかります。時代的には古い童話ですが、今日、私達が考えなければならない大事なテーマを扱っています。

「眠い町」のテーマを考えると、右のテーマを含め、およそ4つの捉え方があります。1つ目は自然破壊や環境破壊への警告。自然や田舎が人々の暮らしにとつて大切だということです。

2つ目は世界に広がる文明化の問題への警鐘。個人の力が国家の力によつて押さえつけられているという解釈です。

3つ目は、高田の町と「眠い町」の関係。古厩忠夫（ふるまやただお）の『裏日本』は、

裏日本という言葉をキーワードに日本の近代の問題を明らかにした良書ですが、それによると明治の最初の頃は、裏日本というような考え方はなかったようです。それぞれの県が豊かに暮していた。ところが近代化の過程で表日本にあたる地域が発展してきて、そこに資本を集中するために、裏日本から人や物や金が集められるようになっていく。そのなかで表日本に対し、日本海側が裏日本と呼ばれるような格差ができてきたと説明されています。

しかし、太平洋側の裏手に当たるために、最初は資本が奪われても、太平洋側が豊かになると、その影響で裏日本の地域にも遅れて工業化産業化の波が押し寄せてきます。古厩氏の言葉で言つて、「周回遡れ」で日本海側の地域が工業化産業化していくわけです。裏日本の産業化が進むのは、明治の終わりから大正にかけてです。そういう時代状況が「眠い町」の話の筋に関わっているわけです。

4つ目は、小川未明が大正3年頃にどんな小説を書いていたかを見てみると、「眠い町」とはすいぶん様子の違つた小説が書かれていることがわかります。人の生や死の不条理、運命や無常といったテーマが他の多くの小説で扱われています。こうした無常觀が「眠い町」の主題と関わっているという解釈です。物語の最後で主人公ケーが眠い町へ戻つてみると、町が都市化され、ケーが目をみはつたという結末の解釈も無常觀とかかわります。

3つ目のテーマにかかり、未明の文章の中に、次のようなおもしろい記事を見つけました。

「一体、高田というところは活気に乏しい。寺がたくさんで森が多くて煙突が少なく、維新の方、幾十年の長い間、眠るようなところであった。中学にいる時、英語の教師が生徒に向かつて、その時分はまだ町であった高田を形容して、「ねむい町」といつたことがある。今だに私の頭に残つていて。」

郷土の高田を「ねむい町」と中学の教師が言つていたことがはつきり書かれています。もちろんだからといって、「眠い町」を高田の町にストレートに結びつけて何もかも解釈する必要はないのですが、作品ができるきつかけとなつた場所として高田があつたことは間違いないようです。

右の文章で未明は続けて次のように書いています。

「東京へ来てから後に、高田に第13師団が設けられて、町が変わって市となつた。それで子どもの時分に小学校へ行つた時、通つた町はどうなつたろう、或は七つ八つの頃、鬼ごとをしたり、駒をまわして遊んだ村はどうなつたろうと思うことが長い間あつた。或る年に帰つてきたが、昔、鞄をさげて学校へ出た道、又祖母に連れられて、頭痛のまじないことをお寺へ行つた通りなど、大分変わつてしまつて、蜻蛉（どんぼ）をつった桑畑や隠れ鬼をした森などが開かれて、そこに大きな建物がたつていて。」

未明が東京へ出たのは明治34年です。大学生活を東京で送り、再び故郷に戻つてみると、

人々の暮らしぶりや町の様子がすいぶん変わっていた。そのときの驚きの気持ちが「眠い町」の背景にあると私は考えています。

*

未明が自分のふるさとの変貌を「眠い町」に書いたんだろうと考えることもできますし、時の流れとともに、みんなが変わっていく、町の人も変わっていく。砂をまいても、いずれ全部流されてしまう。そうしたもつと大きな時の流れの作用が人間の営みの背後にあることを未明は書きたかったと考えることもできます。そんなふうに考えると、「眠い町」をもう少し違つた角度から捉えることができないかと思います。

未明は大正3年にまだ童話をほとんど書いていません。明治43年に『赤い船』という童話集を出していますが、後はずつと小説を書いていました。小説を書くことに余裕がでてきましたから童話を再び書きはじめたのか、それとも小説が書けなくなってきたので童話を何か新たなものを求めようとしたのか。そんな目で「眠い町」を捉えなおしてみるのも面白いでしょう。

第三回 小川未明の物語世界を遊ぶ—作品選 択・演出方法について—（講座要旨）

12月1日（日）土居安子氏

（大阪国際児童文学振興財団主任専門員）

私は子どもたちと児童文学作品や絵本作品の物語世界をこころからだを使って体験するというワークショップを実践しています。

に小川未明「山の上の木と雲の話」の作品世界を遊びますが、大人の方は昨年と参加者が重なる可能性も大きいと考え、未明童話「月夜と眼鏡」をこそとからだを使って体験しながら、作品世界を探つていきたいと思います。私は小川未明の研究者ではありませんので、皆さんと一緒に勉強させていただくつもりで参加させていただきます。

物語を次の7つのカテゴリに分け、グループの中で役割を決めて読んでいきます。

A 「自然の描写」
B 「おばあさんの行動や心の思い」
C 「眼鏡売りの行動」
D 「女の子（こちよう）の行動」
E 「おばあさんの台詞」
F 「眼鏡売りの台詞」
G 「女の子（こちよう）の台詞」

「月夜と眼鏡」というタイトルは、作品自体を象徴するとても大事なものです。どうしてこのタイトルなのかということが、今日の一番のポイントになります。「おばあさんの○○」でもなければ、「こちようの不思議」でもない。そして「月夜と眼鏡」ではなく、「月夜と眼鏡」と、プラスになっています。

最初の章はA「自然（情景）の描写」がたっぷりと語られていました。それはなぜなのかということも、「月夜と眼鏡」というタイトルに起因しているはずです。

最後まで分けてみると、最初の章と最後の章は情景の描写が多く、あいだの章は行動と台詞が多いことがわかります。そして物語の最後は「ほんとうに、いい月夜でした」で終わります。つまり、月夜の描写で始まって

（二文目）月夜の描写で終わっています。「月夜」であることがこの作品にとってとても重要な意味を持つており、それゆえにタイトルの中にも「月夜」という言葉が入つていてることがわかります。

このように、カテゴリーに分けることで見えてくることがあります。さらに声に出して読んでみるとわかることがありますので、グループに分かれて読んでみましょう。

*

おばあさんは「静かな町のはずれ」、つまり「町」と「野」の境界に住んでいます。町の喧験の中に住んでいたら、こちようがやつて来るというのはありえませんし、野に住んでいたら「眼鏡」という文明の部分がなくなってしまう。ちょうど境界に住んでいたからこそ、起きた出来事です。あっちが町でこっちが野、とイメージしてください。そして、長い雪の季節が終り、5月くらいの「緑の葉につつまれているころ」。そんな頃の「おだやかな、月のいい晩」です。最後も「ほんとうに、いい月夜でした」で終わりますが、「いい」という言葉が最初と最後に出てくる、本当に「いい」お話を。

おばあさんが空想していた「自分の若い時分」も娘、「離れて暮らしている孫娘」も娘、そしてこちようも娘です。この、おばあさんの中にある「娘に対する思い」と、こちようが娘の姿で見えたことは繋がりがあります。この童話を書いた数年前、未明の長女が三歳で亡くなっています。こちようは「十二、三の美しい女の子」の姿で現れます。おばあさんが空想していた、若い時分や孫娘はいくつ

*

眼鏡売りの男は、「小さな足音」「背のあまり高くな」いう表現、月の光や草花の描写で、妖精のような、この世のものではないふうに演出されているように思えます。おばあさんは棚や目ざまし時計など、ありふれたもので演出されている。あとでわざることですが、おばあさんの言う「よく見える」と、男の言う「なんでもよく見える」は違うんですね。眼鏡を手に入れたおばあさんは、どんどん娘の心に戻つて行き、その状況がこちようとの出会いを可能にしていく。おばあさんは家の中という人間世界にいますが、月の光に照らされた魔法の世界に出ていく準備が、だんだんにできていくのです。

いろいろな解釈があると思いますが、私は「月夜と眼鏡」というタイトルは、この晩はおばあさんにとって、こちようにとっても、「月夜」という自然の魔法と「眼鏡」という不思議な男がもたらした魔法によって幸せになれる時間だったということを表現しているよう気がします。

この作品は、未明の他の童話に比べても、とても前向きで「生きる」という感じがします。研ぎ澄まされた言葉で情景描写が作られていて、未明の言葉の選び方のすばらしさを読めば読むほど感じる。

一言一言どう読めばいいかを皆さんと考えていく中で多くの発見がありました。

*

おばあさんは、娘の気配を感じられなくなつたので、立ち止まって振り向いた。振り向いたら娘がいなかつた、というのとは違うのではないかと、この順番の違いは大きいと思います。おばあさんはそのあと娘を探したりせず、家の中に



小川未明文学館所蔵品紹介

小川未明顕彰委員会の協力で、24年度から開始した文学館所蔵品紹介展示。その内容を一部ご紹介します。過去の展示は、文学館ホームページでご覧いただけます。

第10回

雑誌「お話の木」



「僕も戦争に行くんだ」と題された表紙。昭和12年5月、雑誌「お話の木」が「小川未明主宰童話雑誌」として創刊されました。発行所は、児童雑誌「コドモノヒカリ」を出していた子供研究社です。

未明は、創刊号に載せた「『お話の木』を主宰するに當りて宣言す」のなかで、「今日の子供は、決して昨日の子供ではない。少し留意するなら、児童等の常識が、いつしか時代と共に変遷したる事実について看取するべき、美しき鮮かな夢を持たずにはゐます。常に児童の心をして、善美・高尚・純粹なるものに憧憬せしめ、もつて明朗なる人間性を養ひ、道理の弁別について過たず、よく自己の行為を反省せしむる」ものが、童話文学

だと述べています。

また未明の同記事の下に、「編集後記」として、奈街三郎が「『お話の木』は、久しく要望されてきた童話雑誌です。が、単に往年の童話雑誌の再現ではありません。いまどき、あの時代の、あの大人の感傷を、あのままくりひろげたところで、なんの発展性があります。それがまた、現代の子供になんの関りがありませう。／『お話の木』は、あの古い絢爛な歴史の土のその上に、どつしりと植ゑつけられた『新しい樹』です。」と書いています。

大正期後半以降、隆盛を見た芸術的児童雑誌の多くは、この頃、姿を消していました。「あの時代の、あの大人の感傷」は、戦争へと向かう重い空気のなかでは受け入れられるものではなかったのでしょうか。「お話の木」が創刊された年の7月には、盧溝橋事件が起きて日中戦争が始まります。未明はその事件に興奮し、一気に戦争協力へと傾斜していくました。昭和12年10月号には、「僕も戦争に行くんだ」という童話を発表しています。

主人公の少年は、戦場で勇ましく戦う兵士を思い、大きな力に感激し、出征兵士を見送りながら、タイトルの決意を固めるのです。

文学館では、「お話の木」全巻を所蔵しています。



第13回

童話集「海から来た使ひ」／今後を童話作家に



小川未明の童話集『海から来た使ひ』は、大正15年7月に創生堂より刊行されました。定価は2円。表紙・挿絵は池田永治が担当しています。創生堂からは、同年12月にも童話集『蜻蛉のお爺さん』が刊行され（表紙・挿絵も同じ池田永治）、この2冊は、いわば姉妹編のようなものとなっています。

周知のとおり、大正15年5月13日、未明は「今後を童話作家に」（東京日日新聞）を発表し、『童話作家宣言』を行いました。そこで未明は次のように述べています。

「私の書いて来た童話は、即ち従来の童話や世俗のいふ童話とは多少違った立場にゐるといへます。むしろ大人に読んでもらつた方がかへつて意の存するところが分ると思ひますが、あくまで童心の上にたち、即ち大人の見る世界ならざる空想の世界に成長すべき童話なるがゆえに、いわゆる小説ではなく、やはり童話といはるべきものであります。／多年私は小説と童話を書いたが、いま頭のなかで二つを書き分ける苦しさを感じてきました。『未明選集』六巻の配布も去る四月に完了したのを好機として、余の半生を専心わが特異の詩形のためにつくした

いと考へてゐます。」

未明が童話作家として専念しようと決意した時期に刊行されたのが、上記の2冊の童話集です。『海から来た使ひ』には、23編の童話が収録されています。

卷頭に置かれた表題作「海から来た使ひ」（少女文藝部 大正14年1月）のあらすじは次のとおりです。



小川未明文学賞



小川未明文学賞贈呈式

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成25年度で22回目を迎え、これまでに延べ1万編を越える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

第23回募集要項

◆募集作品

小学生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。400字詰め原稿用紙を縦書きで使用。

- ①部門（小学校低学年向け）20～30枚
②部門（小学校中学年以上向け）60～120枚

* 詳細は左記にお問い合わせください。

◆応募資格

年齢、プロ・アマを問いません。

上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

◆応募方法

平成26年10月31日（金）（当日消印有効）

◆入選作

- ・大賞1作（記念品『小川未明童話全集』・賞金100万円・副賞）
・優秀賞3作（賞金20万円・副賞）

◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、平成27年3月上旬（予定）に本人に直接通知します。

最後に、このような夢のある素晴らしい文学賞を長年主催している上越市の皆様、小川未明文学賞委員会及びご協賛・ご後援の皆様、そして正真正銘の素人の作品に光を当てて下さいました選考委員の先生方に、心より感謝申し上げます。

受賞のひとつこと

この度、小川未明の名を冠した由緒ある賞を戴き、身に余る光栄に驚きと喜びでいっぱいです。記念品として贈られました全集は、手にしただけで静謐な気持ちになるような美しい装丁で、数々の名作を改めてじっくり読み返しております。

未明と聞いて私がまず思い浮かべるのは、色彩の印象です。「月夜と眼鏡」の幻想的な青。「赤いろうそくと人魚」の闇に浮かび上がる赤。「月とあざらし」の、水墨画のごとき黒白の世界。一つの物から着想し、イメージの进るまま一息に描き上げた絵のような物語に、自らの煩慮を投影する、その独特な芸術に惹きつけられます。

しかし、私が未明作品に出会ったのは、残念ながら、大人になり何事も頭で考えるようになってからのことでした。幼い頃心に染み込んだ童話として真っ先に思い出すのは、イギリスの作家エリナー・ファーリジョンの「年とつたばあやのお話かご」です。毎晩眠りに就く前に、ばあやが靴下をつくるいながらしてくれる、世にも不思議な昔語りは想像の世界の地平をどこまでも広げてくれました。

小学生の頃、国語の教科書で読んだ物語にも、忘れられないものがいくつもあります。中でも杉みきさんの「わらぐつの中の神様」には、どれほどのときめきを感じたでしょう。私が童話に求める憧れの全てが、素朴なわらぐつの中に秘められているのです。なんと三十年の時を経て、私の娘の教科書にも掲載されており、娘もやはり大好きだと申します。本当の輝きを持つ作品は、世代が変わっても心に響くものなのだと、実感致しました。今回の応募にあたり、その杉さんが上越市のご出身で、本賞に深く関わっておられることが知り、大変励みになりました。

受賞致しました「影なし山のりん」は、山と一体になって育った娘、りんの物語です。山を守るために夜の森を駆除するりんのまつすぐさは、多寡の差こそあれ、どんな子供にも潜んでいるものだと思います。りんと共に影なし山を駆けまわるような気持ちで読んで頂けたら、本当に幸いです。

最後に、このような夢のある素晴らしい文学賞を長年主催している上越市の皆様、小川未明文学賞委員会及びご協賛・ご後援の皆様、そして正真正銘の素人の作品に光を当てて下さいました選考委員の先生方に、心より感謝申し上げます。



第22回小川未明文学賞大賞受賞
宇佐美 敬子

（大賞作品「影なし山のりん」）

応募・お問い合わせ先
〒940-0832 新潟県上越市本町3-3-2
上越市文化振興課
TEL 020-5256-6003
FAX 020-5256-6004
E-mail mimei@city.joetsu.lg.jp

平成25年度
の活動

- ・小川未明文学館ピックブックシアターおはなし会…全24回、延べ参加者268名
- ・出張おはなし会（小・中学校、福祉施設等）…25ヶ所、1,348名
- ・特別展おはなし会（ミュゼ雪小町・小川未明文学館）
- ・会員の研修会…全5回



出張おはなし会

おもに小学校へ出かけました



(大島小学校) お話の会うさぎ
「牛女」「赤いろうそくと人魚」「おかあさんのひきがえる」をしました。

感想から

「野ばら」

戦争のお話で心に残りました。かなしいお話でした。

「赤いろうそくと人魚」

はじめは、神様からの子と喜んでいたのに、娘を売ってしまい信じられなかった。かなしいお話でした。

「どこかに生きながら」

母ねこが子ねこを大事に守っている姿が心にのこった。お母さんねこが少しかわいそうでした。



(美守小学校) グループさくら
「月とあざらし」「野ばら」等をしました。



(春日新田小学校) グループ空
「赤いろうそくと人魚」は、こわくて不思議な話でした。



(戸野目小学校) 未明童話の会
「どこかに生きながら」「まごころのとどいた話」「野ばら」をしました。



文学館おはなし会

（毎月第2、4日曜に実施）



小さな子も、お母さんと一緒に静かによく聞いてくれました。

上越市文化振興課
出張おはなし会、会員加入の連絡先

〒943-0832
上越市本町3-3-2

T E L 025-526-6903

F A X 025-526-6904

E-mail : mimei@city.joetsu.lg.jp

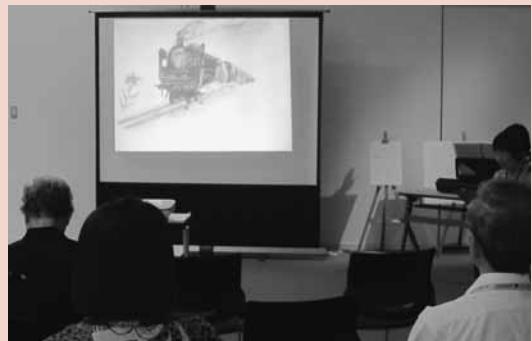
のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.10

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2014年5月31日

ミュゼ雪小町でおはなし会



8月にミュゼ雪小町で、『眠い町』の原画展が開かれました。それに合わせて、堀越千秋さんのすばらしい原画が展示された会場でおはなし会を開きました。

特別展おはなし会 10月6日（日）

1. 眠い町
2. 野ばら
3. お母さんのひきがえる
4. ガラス窓の河骨
5. どこかに生きながら

- グループ空
グループさくら
お話の会うさぎ
せせらぎの会
未明童話の会



謙信KIDSスクールプロジェクト「童話の楽校」の子どもたちにも鑑賞してもらいました。

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力のお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただけますと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

平成26年度 小川未明文学館カレンダー

5～6月 朗読研修会

5月20日・6月3日・6月17日

6～8月 童話創作講座

6月15日・7月27日・8月30日

11月 特別展 未明童話を描いた作家展

*各種イベントを開催

文学館講座 3回

10月 小川未明文学賞締切 31日（金）

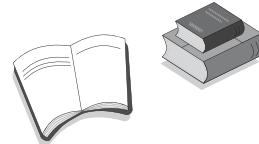
3月 小川未明文学賞贈呈式

*通年で、所蔵品紹介の小展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会

*毎月第2・4曜日午後2時から文学館にて開催

*学校等での出張おはなし会を随時開催



小川未明文学館のご利用案内

開館時間

火～金曜日

午前10時から午後7時

（6月から9月の間は午後8時まで）

土・日・休日

午前10時から午後6時

休館日

毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）

休日の翌日・館内整理日・資料整理期間

年末年始（12／29～1／3）

入館料 無料



お問い合わせ

〒943-0835

新潟県上越市本城町8-30
(高田図書館内)

TEL 025-523-1086
FAX 025-523-1108
URL <http://www.city.joetsunigata.jp/>

発行 上越市文化振興課 〒943-0832 上越市本町3-3-2

T E L : 025-526-6903 F A X : 025-526-6904